

寺島 敏晃<sup>1</sup>、佐藤 聖和<sup>1</sup>、吉澤 恵子<sup>1</sup>、山二 綾子<sup>1</sup>、染谷 忠道<sup>1</sup>、林 嘉仁<sup>1</sup>、宮島 真悟<sup>1</sup>、森本 嘉純<sup>1</sup>、大石 竜<sup>1</sup>、佐藤 宜伯<sup>1</sup>

【目的】血管内超音波装置(以下 IVUS)は、従来のグレースケールに基づく定性評価において、病変形体を輝度の明暗で表し描出されたデータからプラーク性状を推測して判断していると言える。今回、今まで経験や知識から判断していたプラーク性状が組織別に4色分類され目視化される。特徴として性状判断を信頼度により各色階調表示させる機能 iLab™(Version2.2)の iMap™ を使用する機会を得たので報告する。【方法】Boston Scientific 社製 IVUS (iLab™) から得られたグレースケール画像を iMap™機能 (40MHz 高周波組織性状解析ソフト) を用いて解析評価する。検討項目は○iMap™の自動解析結果(Trace Assist™機能)と Trace Assist™に手動で修正を加えた結果の比較検討○装置の基本操作性を従来の iLab™(Ver. 1.3 と Ver2.2)で比較○症例を提示した検討【結果】iMap™における、自動解析結果と Trace Assist™機能を用いたマニュアルトレースを基準とした計測結果では、装置の自動認識による計測において過小トレースする傾向があった。また装置としての操作性については、従来の Version で問題とされていた点の改善がなされており、計測における操作性の向上を実感できた。【まとめ】Boston Scientific 社製 IVUS イメージングシステム iLab™(Ver2.2)の iMap™機能は、プラーク性状の判別を従来の使用環境で容易に出来るものであり、操作方法についてもグレースケールを解析するのと同様な手技で実施可能である。これらのデータは臨床で治療方針を決定する一つの指標としてのツールになり得る事が示唆される。